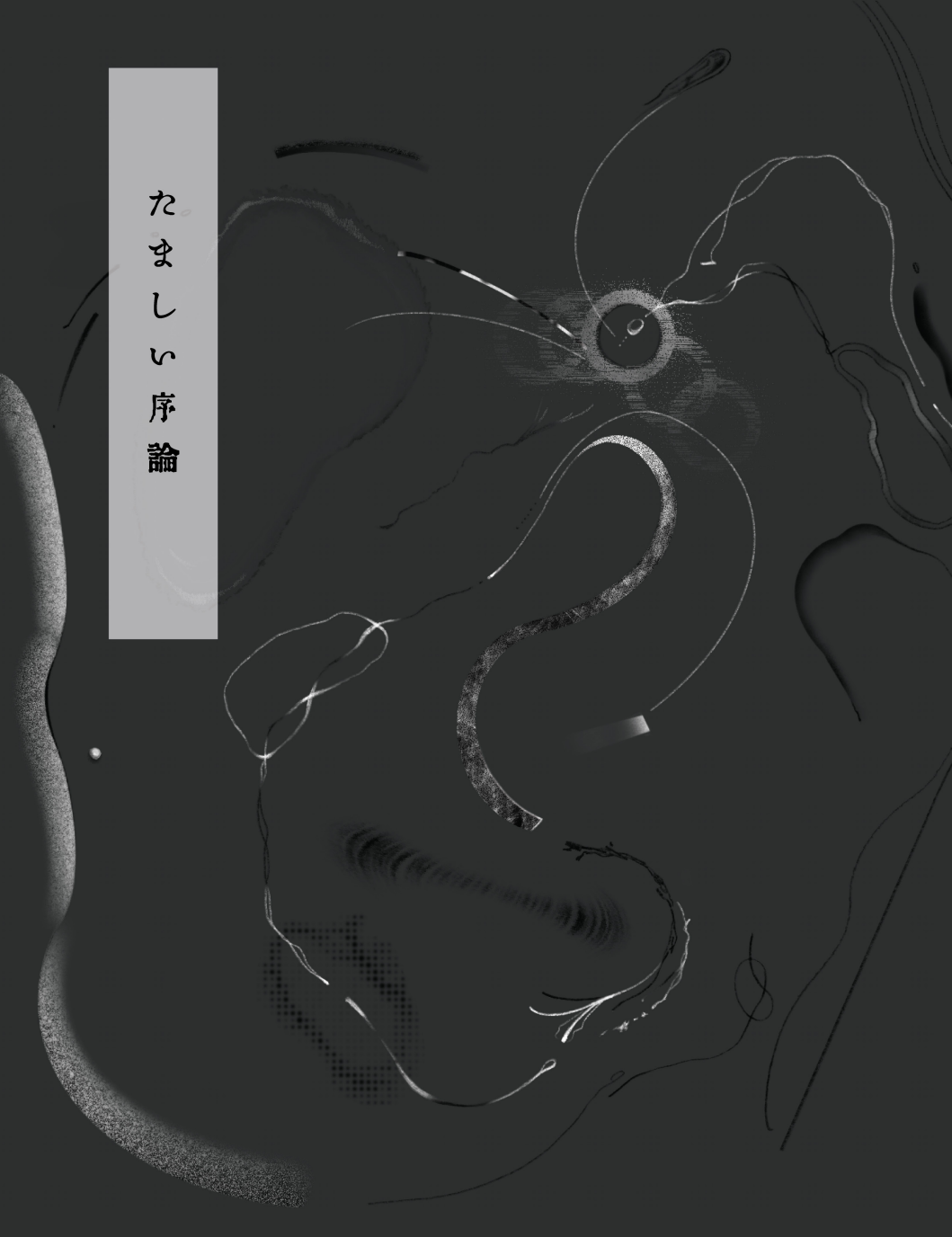


たましい序論



第一部 かかわり

人は時間を積み重ねて生きてゆき、いやが上にも時間を積み重ねて生きてゆく。人はこれを辞めることはできない。生きることとは、時間を積み重ねるということの遂行としてあらわれる。そして、人は生きることが辞めない限りにおいて、積み重なった時間から追放されることも、解放されることもない。人がたとえ過去を忘れようとも、それは痕跡を消去し、人と過去とのかかわりを断ち切るものではないのだ。

このことの次第は、人という現象の根源をわかすものと

なるはずである。人が自らの過去に囚われていなかったならば、生きることにはただ、当人におけるいまいこの浪費でしかなく、人がそもそもひとつの現象として捉えられることもなかったであろう。私が私に自認される存在として生きていることも、私が世界とかかわりをもちながら生きていくことも、私が過去によつてしるしづけられた存在であることのあかしなのだ。

哲學の歴史のなかでは、しかしながら、このことが表立って主題とされることはなかったように思われる。哲學は——ことに近代の哲學は——人間というものをつねに最大の對象としてきたのであるが、そこにおいて人は点的に

停止した存在として描かれてきたのであり、それぞれの瞬間における人と周囲の環境との関係——すなわち、そのときそこにおける人の在り方——から人という現象の説明が試みられてきた。哲學があくまでその段階にのみ留まっていたのは近代初期の話であり、以降哲學の発展に従いより廣い領野において人間を捉える試みが敢行されてきたにせよ、依然として時間を積み重ねるといふ人の在り方は哲學の隠されたところに存している。

人は生き、いやが上にも生きてゆく。本稿はこれを人という現象の要諦として捉え、その説明を試みるものである。そのためには自我、主体、精神、現存在、といった従

來の哲學における概念とはことなる概念を作り上げ、人という現象を呼び覺まさなければならなかった。この道程は綿密な歩みのもとに紡がれなければならないものであつて、着実な論証の上にしか人という現象は自らをあらわしあかすことはない。しかし本稿はのちに續くべき本論に先立つ序論として、その綿密な行程をあくまで素描するものとなる。

そのときそこにおける人の在り方を解明するところに、人という現象の探究の着手点を置くことは、それでも間違つてはいない。最終的にはそのときそこにおける人の在り方自体が、時間を積み重ねることという生きることの

様態から解明される運びとなることがあるにしろ、ひとつの現象を説明するためには順序が必要なのだ。物事の順序とは現象に内在するものなのではなくて、あくまで言語操作において生じる現象の擬制に過ぎない。だから、議論の展開という点において重要なのは、物事の本質を先に呈示することではなく、予備的な説明を必要としない、一般的な了解が汎く行われているところから記述を開始することなのである。ゆえに本論においても、そのときそこにおける人の在り方を解明するところから、議論が始められることとなる。

人という現象において最も明白な事柄のひとつは、人は

つねにいまここにいるということ、そしていまここにのみいるということである。人は生きている限り、いることを辞めることができない。人はつねにいて、かつ人がいる場所とは当人において唯一のいまここなのである。

これは人が日々つねに日常のうちにあって経験し感得していることであり、だからそここの事象に基点を置いて人という現象を考えるべきなのだ。人がいるということは、人が生きているということ、その人において人生が遂行されているということなのであり、それは人が抽象的な意味合いにおいて（いる）ことからあかさされ得ないことなのである。

人がそのときどこにいていまここにいることは、居合わせるという用語において、現象として示されている。居合わせるというこの用語は、人がいまここに直面し、遭遇し、投げ込まれ、またそのうちで行為していることの次第を示しているのであり、人がいまここにいること、そこにおいて生きていることの根源を指し示す概念として、人の存在の様態それ自体に言及するものである。

人がそのときそこにいることには、諸々の様態に細分化され得る様々な在り方が存しているものであり、それは沈思していることや放心していること、会話に興じていること、制作に打ち込んでいることなどであるのだが、こうし

た諸々の様態はすべて居合わせるという現象のうちにあるのだ。

人が居合わせるいまここを、場という言葉によつて示出すこととしよう。人はつねに場に居合わせて存在している。場には固有の廣がりがあり、それはいまここという言葉が示している通り、空間的な廣がりと時間的な廣がりの双方を含む概念である。

そのときときにおける場の空間的な言辞としては、部屋、公園、職場といった比較的狭い廣がりを用いられることもあれば、渋谷や新宿、東京といったより廣い廣がりを用いられることもある。こうした言辞は確かにそのとき

きにおける当人の場の了解を指し示すものであり、人がどこに居るのかという意識もまたこうした言辭から芽生えるものではあるが、しかし、場はなおこのように名詞により規定される廣がりなのではない。これらの空間を指し示す名詞はあくまで、ただ外縁的に形成された空間の間仕切りに過ぎないのであつて、人が場に居合わせるという在り方に基づいた廣がりの規定とはなっていないのである。

場はそもそも人の居合わせる廣がりなのであるから、場の廣がりの範圍もまた、居合わせるといふ人の在り方から規定されなければならない。先に居合わせることの在り方を、幾つかの例を通じて素描し、潜在的な了解のうちに居

合わせるという在り方を示していた。だが、場の廣がりの規定するため、居合わせるという現象のこの次第を、場という概念に寄り添った仕方で記述する必要がある。これはまた、居合わせるという現象のより根源的な相をわかす試みともなるだろう。

居合わせることは、人がいまここに直面し、遭遇し、投げ込まれ、またそのうちで行為するといった事柄を指すことを示していたが、これらの在り方はすなわち、人と周囲とのかわりとして示し出すことができる。人と周囲とはあいだが存するのであり、このあいだに存している現象こそが、かかわりなのだ。かかわりは個々の具体的な事

象であり、直面することや遭遇することといった言葉の持つ抽象的な響きとは關わるところがない。人が場に居合わせ、場とかかわるとき、それは予め定められた抽象的な概念としての場とかかわるのではなく、あくまで人は手もとや目のまえにある事物とかかわるのであるから。すなわちかかわりとは例えば、人が目の前にあるコップを見たり、戸外から響く風の音を聴いたり、ペンを手に取ったりすることなのであり、こうした日常的な行爲のひとつひとつがかかわりとして示されるべきなのである。

このかかわりという概念こそ、場の廣がりをあかしだすものなのである。場の廣がりとは、かかわりの範圍として規

定される。例えば私が自室で文章を書いているとき、私は手に持つペンや文字を記す紙とかかわり、机上のコップや書物とかかわる。焚いている線香や、不規則な周波の音を出す空調機とかかわる。窓から日が射せば、私は天空や太陽とかかわるのだ。しかし、このとき私は戸外の路面とはかかわっておらず、隣家の住人とも——彼が静かである限りは——かかわることがない。このように、人のかかわりには範囲があり、かかわりの範囲が場を規定する。かかわりの範囲によつてしるしづけられる廣がり、人が居合わせる場なのであり、人が積み重ねてゆくいまことなるのである。

場において人がかかわりをもつ個々の対象としての事物は、実在という在り方を有している。実在とは、場にある物の存在自体を指し示す概念であり、対象物の表象や、対象物に對する解釋などとは無關係にあるものである。コップにはコップの実在があり、ペンにはペンの実在があるのであるが、これらの実在はコップの見え方やペンの見え方とは無關係に存在しているのである。場は種々様々な実在によつて構成され、充たされており、場を実在の總體として見て取ることとは、場の認識のひとつの方法として、容認されるものである。

人と実在どのかかわりは、感じることという様態のもと

にある。例えば空は実在を有しており、人が空を見ると
き、人は空の実在とかかわる。このとき人と実在のかか
わりは見るという行爲として存しているものであり、この見
ることはすなわち、感じることもという様態におけるかかわ
りなのだ。

感じることもというかわりににおいて明白なひとつのこ
は、感じることに於いて実在はある固有の感じられ方を有
するということである。私が空を見ると、空はある仕方
で——ある青さ、ある遠さ、ある眩しさのもとに——見ら
れているのであり、それは空がそのとおり存在している
仕方すなわち空の実在のかたちなのではなく、あくまで私

における空の感じられ方、すなわち私の空どのかかわりのかたちなのである。

かかわりのかたちは、人ごとにことなる。私が空を見る
とき私にはある青さ、遠さ、眩しさで空が見えているけれ
ども、そのとき私の隣に人がいれば、彼にはまた違った青
さ、遠さ、眩しさで空が見えている。彼にとつて空は、私
が見るよりより鮮やかで、より近く、より眩しい仕方で見
えているかもしれないのだ。この違いこそかかわりのかた
ちの相違という現象として見て取られるべきものなのであ
る。

かかわりのかたちが人ごとにことなるとはいえ、人がか

かわりの対象としての實在を他者と共有していることに変わりはない。たとえば見え方がことなろうとも人は他者と同じ物を見るのだ。實在はそれについての表象や解釋と無關係に存在しているものであるがゆえに、それは人どのかかわりにおいてその實在を侵食されることがない。實在はあらゆるかかわりを受け入れながらもあらゆるかかわりを跳ね除けるかのように存在しているのであって、個々の實在において世界は果てているのである。

こうした實在の在り方によって、世界の現実性がもたらされることとなる。人が現実の世界に生きているとはつまり、人が他者と共通の實在とかわっていることを知るこ

どなのだ。もし人が他者と実在を共有していなかったとするならば、人の見るものや聴くものは何らの手應えも当人に与えず、世界はひとえに幻と変わるところがなかったであろう。だが人は他者もまた同じ物を見、同じ音を聴いていることを知るのであり、そこにあつて自らもまたそれを見、聴いていることを知るのである。世界が現実のものであるとは、このことを知ることには他ならない。

ところで、ここで敢えて実在という用語のもとに記したこの概念は、哲學の歴史のなかではもつとも厄介な問題のひとつとして語られ續けてきた。というのも、人はたとえば或る物を見たとしても、それはただ自身それを見たことを

意味するだけであつて、物があることを示すのではないと説かれてきたからだ。人は物を僅かに認識するに留まるのであつて、實在は認識の彼方にあり、ゆえに實在を実証し確認することはできないというのである。

このように實在そのものを否定する議論が哲學の歴史のなかに生じた原因は、かわりのかたちの相違という現象を見逃し續けてきたところにある。かわりのかたちの相違というこのあきらかな現象は、哲學の歴史においてはつねに疑念として抱かれるに留まり續けてきた。確かに、物自体とその表象を主観と客観といったふうに捉えれば、それが人ごとにことなるものであることは奇妙な現象として

映る。両者は本来同一のものであるはずであり、ゆえにその相違はひとつの疑念として抱かれたまま解消されることがない。だが世界には實在があり、人はそれとかわるだけであるということ、そしてそのかわりのかたちが人ごとにことなっているだけであるということが一度感得されたなら、各々がことなる様相の世界に住んでいることと實在の存在それ自体とを同時に認めることができるだろう。

このように實在は、かわりの対象となるものではあるものの、それ自体はかわりによつて影響を受けず、また自ら實在とかわることもない。實在は場に居合わせることでなく、何かを感じることもないのだ。これに對し、自

らかかわりを有し、場に居合わせて生きるものの存在をひとまず実存と名指すこととする。この規定に則れば人の存在は実存であり、この点で人は実在と区別される。人は場において実在とかわることは先に記されたが、人は場においてまた、他の実存すなわち他者ともかわりをもつ。人が場においてかわる他者は、隣人という用語のもとに示される。

人が隣人とかわるとき——すなわち場において他者とかかわるとき——人は隣人とともに居合わせている。このともに居合わせるとは、人と他者とのかわりが決して一方的なものではなく、交互的なかわりとして存している

のであり、またそこにあつて人は他者を理解し想像するのであり、かつ自らもまたかかわられるものとして存していることの次第を指し示す概念なのである。

ここにおいてあらわれる実存とのかかわりは、語り合うことという用語のもとに示されることとなる。語り合うことは、その用語の表面的な意味として会話をすること、言葉を交わすことのみを意味しているのではなく、人が隣人とともにいることにあつて有するかかわりそれ自体を指すものであり、それはただともに時を過ごすことをも指す概念なのである。実存とのかかわりが語り合いであることは、人が実存とともに居合わせていること、交互的なか

わりの上に人と隣人が存していることにおいてあかされている。そこにおいて人は隣人に直面させられているのだ。

語り合うことがあかし出すのは、人が隣人とともに居合わせることにあつて、かかわられるものとして存しているというそのことなのであり、人がかかわられることにあつてまた、自ら実存として世界のうちにしるしづけられていることの次第なのである。

このように実存とのかかわりは、實在とのかかわりとはことなる性質をもつ。実存とのかかわりは、先にあかされた感じることという様態におけるかかわりのみでは説明することができない。語り合いは無論感じることを含ん

ではいる——感じるかどうかかわりがなければ、隣人の仕草を見たり、隣人の声を聴くことはできない——けれども、それだけに終始するものではないのだ。語り合いには、実在をある見方のもとに見、ある聴き方のもとに聴くこととはことなるかわりが存している。それは理解する、解釋する、語る、考える、想像する、といったかわりである。これらのかわりは、思うことという様態におけるかわりとして示し出される。

思うことというかわりは、人が生きている限りつねにもちつづけるかわりであり、人の存在様態の根源を爲すものである。思うことは、何か特定の事象について思索す

ることであつたり、思いを巡らせることそれのみを指す言葉ではない。思うことは謂わば、一般的な用語に照らし合わせて云えば、心をもっていることそれ自体である。

ゆえにそれは、考えることや想像することのみならず、記憶することや何らかの氣分を有していること、さらには放心していることすらも指し示す概念なのだ。だから、思うことという様態におけるかわりを探究することは、人という現象をあかす上で欠かすことのできないものなのであるが、その遂行には現段階では困難がつきまとう。思うことはそのかわりの對象を輪郭の明瞭な事物として現像することができないため、感じることと同じように具体的に

は、まだその在り方をあかすことができないからだ。思うことは、特定の物事を考えるといった様態としてあらわれることがあるが、その場合においても思考の範囲は予め定められているものではなく、また例えば人が放心しているとき人の思っている對象が何であるかということについては、特定することは殊更意味を爲さない。こうした場合において思うことは、かかわりの様態というよりも寧ろ、人という現象の様態であると考えることができるのである。

ゆえに思うことのさらなる探究のためには、人という現象を呼び覺ます概念が予め導入されていなければならぬ。だが、このような概念の導入のためにもまた予備的な

議論を重ねる必要があるのである。そのためまず、次なる着手点として、ここまでも幾度か登場した世界という概念について論じる運びとなる。

世界に關する議論に入る前に、ひとつ註記しておかねばならないことがある。ここまでの議論において、その展開に生じざるを得なかつた歪みのため、或るひとつの看過すべからぬ誤解が生じていた可能性がある。それは、人の存在状態の根源を爲すかかわりという現象が、感じるというかかわりと思うというかかわりの二つに類別されるという誤解である。着手点のないところに議論の端緒をつくり、順序のない現象を順序に従つて展開するという文章の要請

上、まず実在について論じ感_じる_{こと}という_かか_わり_を示_し、次に実存について論じて思_うこ_ととい_うか_かわ_りを_示すとい_う手_順が踏_まれて_いた。だがこ_れはあ_くま_で文_章の形_式にお_ける手_順に過_ぎな_いのであ_つて、か_かわ_りとい_う現_象の在_り方_その_もの_どは關_係の_ない_こと_であ_る。か_かわ_りとい_う現_象は、その_ように類_別さ_れる_もの_なの_では_ない。実_在の_どの_かか_わり_にも感_じる_こと_を思_うこ_ととい_う二_つの_様態_が存_し、実_存の_どの_かか_わり_にもこ_の二_つの_様態_が存_して_いる_ので_ある。人_は何_も思_わず_に感_じる_こと_はで_きず、何_も感_じず_に思_うこ_とも_でき_ない。何_も思_わず_に感_じる_こと_があ_ると_すれ_ばそ_れは何_らの_認識_にも_なり_得ず、何

も感じずに思うことがあるとすれば、その思いはいかなるかたちももち得ないだろう。この二つの様態はかわりを類別するものとしてではなく、かわりの探究にはあくまで欠かすことのできない様態の分類として存しているに過ぎないのである。

ここまで、場という廣がりとかかわりという存在の様態の概念から、人がつねにいまここに居合わせながら生きているという現象を探究してきた。そして、ここまでにおける場の記述はあくまで人が感受する實在の総体としてのものであり、そのようにかかわりの範囲として規定された廣がりのなかで、人は隣人としての他者とかかわるのだと説

かれてきたのであった。

實在の總体としての廣がりを書述することは、かかわりという概念を導入する以前においては確かに必要なことであつた。實在ということ——目のまえにあるものが、目のまえにあること——こそ一切の予備的な説明に頼らず議論を展開すべき縁となる現象なのだから。しかしながら、かかわりという概念がつくられ、かかわりのかたちという現象があかされたいま、人があくまで感受する對象としてのみ靜的に存在する場という廣がりとはことなる、人がかかわりをもつことにおいて自らかたちづくっていく様相として立ち現れる廣がり、すなわち世界という現象を改めて探

究しなればならない。

世界とは、人がかかわりをもつことにおいてかたちづくられる廣がりである。世界は実在が形成する事実的な場とはことなり、人がかかわりをもつことによつてその実存から廣がつてゆく実存論的な廣がりなのだ。視覚の強い人であれば世界は鮮やかで煌びやかなものであるかもしれない、聴覚の強い人であれば世界は艶やかで細やかなものであるかもしれない。前者は世界がより平面的で、後者は世界がより立体的であるのかもしれない。子供は時間の流れの遅い世界に、老人は時間の流れの速い世界に住んでいることだろう。このように世界の様相はかかわりのかたち

に呼應する。人は自らに固有のかかわりのかたちによってかたちづけられた世界に住まうのであり、そのうちでつくり、語り、生きるのである。

世界はかかわりがかたちづくる廣がりであるから、それはまた思うことというかかわりがかたちづくる廣がりをも含む。すなわち觀念的な廣がりもまた世界的なものであつて、例えば言葉によつてかたちづけられた世界、音によつてかたちづけられた世界といったものがある。世界は、實在しない場所、どこにもない場所としても存しているのであり、それは場のように時間的、空間的に限定されることのない概念としての廣がりとして規定されているのだ。

人は世界に住まいながら、場に居合わせ、實在とかかわる。實在は、感じられるものとして世界の基底をかたちづくるものであり、また、他者と共有されるものとして、人の世界が現実から離脱せぬよう繋ぎ留めるものである。一方でまた、人は世界において実存とかかわりをもつ。世界においてかかわられる実存は、隣人という様態のものにはいないことがある。ともに場に居合わせていない他者ともまた、人はかかわるからである。こうしたかかわりは、他者に思いを馳せること、他者に宛ててものをつくること、他者の作品に触れること、などとしてあらわれる。ここにおいて、人は故人や見知らぬ人ともかかわりを有するの

だ。

人が場においてかかわる他者は隣人と名指されたが、人が世界においてかかわりをもつ、隣人という様態のもていない他者は、〈ひと〉と名指される。〈ひと〉は世界という現象の要諦を爲すものであり、〈ひと〉がいることにあつて世界は人という現象があらわれる地平となるのだ。この〈ひと〉という表記が用いられるとき、それは抽象的な像としての人を想起させるのではなく、人が世界においてかかわりをもつ具体的な実存を指示することが企圖されている。人が〈ひと〉とかかわることは、先の例——他者に思いを馳せることや他者の作品に觸れること——のよう

に、個別の他者をその対象としていることがあるが、かわりの対象として個別の他者をもたない〈ひと〉のかかわりもまた存しているのである。それは例えば、著作を残すこととしてあらわれる。本を書くとき、著者は誰か特定の他者を読者として想定しているのではない。書かれた本が誰の手に渡り、誰がそれを読むのかといったことは、著者の裁量の範疇にはない事柄である。だが、それでも人は文章を著すのであり、そのときそれは〈ひと〉のかかわりとして行われる行為となるのである。

第二部 たましい

人が時間を積み重ねて生きてゆくということの次第は、哲學の歴史においてつねに隠れたところに留め置かれてきた。哲學の議論においてつねに人は点的に停止した存在として描かれ、つねに変わりゆくものとして存在しているという事象は、等閑にされてきたか、もしくは晦渋な仕方においてのみ扱われてきたといつてよい。人という現象を、主観と客観のあいだの認識作用の結果としてみて取ればそれは当然のことの運びであるし、人という現象を人間精神の進歩の段階として見て取るならば、人が場に居合わ

せることにおいて時間を積み重ねてゆくことの次第はあかされないどころか、寧ろそこから目を逸らさせる陥穽とすらなりかねないのである。ハイデガーの著作からは、この問題に對し現存在の歴史性という概念を与えて迫ろうとした痕跡が窺われるものの、そこに深入りすることはなく、現存在を可能存在として描くことで、辛うじて隠された仕方においてのみ示唆が与えらるに留まった。

人がつねに居合わせさせられるいまここを決して逃れることができず、かついまここをつねに積み重ねて生きているという現象は、決して等閑に付されて構わない些事などではない。しかし、このことがつねに隠されてきたことの

所以は、「私は時間を積み重ねて生きている」という言明が哲學の議論におよそ耐え得ない、あまりにも不用意な言明であることを存している。そして、この「私」という項に自我という概念を当てはめようと、現存在という概念を当てはめようと、その不用意さは決して取り除かれることはなかつたのである。

この現象を言葉にあらわすにあたり、人というものを全くことなる概念から呼び覺まさない。本論ではこの試みを遂行するにあたり、たましいという概念が導入される。人はたましいである。

たましいという概念が指しあわわすのは、現象としての

人、或いは人という現象そのものである。人は或るひとつの現象であり、それはかわりを持ち、かわりを積み重ねて生きてゆくという現象である。このことの次第こそが人という現象の根源をあかすものなのだ。この人という現象の在り方は、たましいの存在の様態として示されている。

たましいとは、人の主観としての能力を示す概念でもなければ、人の存在の体制を記す概念でもない。人という概念に付着する様々な現象から、人がその人として生きているという現象をかたちづくるものだけを残したときに、あわられるものがたましいである。哲學の歴史のなか

で、このたましいという概念が発見されたことはなかったものの、たましいに付随して、あるいはそこから派生して生じる諸々の現象は捉えられてきたから、哲學史を見渡せば一見たましいと同等に見える概念が散見されることとなる。心、人格、理性や感性、自我、精神、現存在、といったものがそれである。しかしこれらの概念はいずれもたましいと同じではない。これらの概念によつては、人という現象を完全にあかしだてることができないのだ。これらの概念は、人をそのときそこにおける機能として見てとるところから生じた概念であり、人が過去によりしるしづけられた存在であること、自らの存在の在處につなぎとめられて

生きている存在であることを看過しているからである。

對してたましいという概念は、人が時間を積み重ねてきたその突先でつねにあらわれる或るひとつの現象であり、人が過去にしるしづけられた、その当人であるに他ならない存在であるというこの次第をわかすものである。

私たちがたましいという概念を必要とすることの所以も、まさしくここに存するのに他ならない。人という現象をわかすという試みにおいて爲されなければならないことは、その試みの過程の裡で、私は何者であるかを知ることである。私は何者であるかというそのことの次第は、決して私がいまここにおいて如何なる機能として存している

かにあるのではない。そうではなくて、それは、私がいまここにしていることにおいてあらわれているものの何たるかを知らることなのだ。私がいまここにしていることにおいてあらわれているものとは、私がいま目のまえの蜜蠟を見たとか、存在の問いを問うたとか、そうした事柄なのではなく、かつて幸せでありまたかつて怖れ、かつて愛されかつて憎まれた私が、いまここに存するということが、世界に何を如何にしてしるしづけているのかという、そのことの次第なのである。私がそれを知ることが望むならば、私はたまたまという現象について考えなければならぬのだ。

先行する議論においては、かかわりという現象が主たる

議論の對象となった。そしてそれは、人が場に居合わせる
ことにおいて實在、実存とのあいだに生じる現象として説
かれていた。しかしその議論の展開には幾許かの難点が取
り除かれることのないまま残存していたのであり、そのた
めにかかわりという現象の根源は充全にはあかされていな
かったといわなければならない。この不用意さは例えば、
かかわりを初めに場における現象として記しながら、のち
においては人が世界とのあいだに有するかかわりを論じた
箇所などに見てとることができる。議論のこうした曖昧さ
のために、かかわりという概念のもつ輪郭が不明瞭なも
となつてしまつていた。

こうした問題は、たましいという概念を導入することにより解消されることとなる。かかわりは確かに、人が場や世界とのあいだにおいて有するものであるけれど、それはあくまでかかわりについての派生的な説明であるに過ぎない。かかわりという現象の要諦を捉えるためには、それはたましいの存在の様態として探究されなければならないのである。

たましいは存在し、そこにおいて人という現象が紡がれている。人という現象はたましいが存在するその在り方なのであり、人が息をすること、歩くこと、見ることや聴くこと、書くこと、描くこと、作ること、読むことなどはす

べて、人という現象として、たましいの在り方なのである。このことの次第は、たましいの存在する様態の根源がかかわりとして見てとられるべきことに存している。たましいは如何なるかかわりも有さずにただ停止して存在していることはない。身体の生は鼓動していることと等しく、身体が身体として存在していることは身体が鼓動していることと見分けがつかないのと同じように、たましいの存在はかかわっていることと等しく、たましいの存在とたましいのかかわりとは見分けがつかないのだ。たましいは存在し、たましいはかかわる。たましいがかかわることににおいて人という現象は初めて現象としてあらわれるのである。

このことの次第は、例えば人がつねに経験しながら存在しているという事象において見てとれることができる。人はつねに場に居合わせているのであるが、そこにおいて人が何事をも経験せずに過ごしているということは考えることができず、たとえば場における経験を後に忘れることがあるうとも、そのときそこにおいては必ず何事かを経験しその場に居合わせている。このことの所以もまた、たましいの存在する根源的な様態がかかわることであることに存するのに他ならない。

たましいの存在の様態がかかわりであることは、かかわりという現象がかかわりの対象に言うなれば先行して存

していることをあかすものである。人がいて、物があつて、そこにひとつのあいだが生じ、かかわりが発生するのではない。たましいがかかわりを有するという現象のうちにあつて、それぞれの實在がかかわりの對象として立ち現れ、世界を構成するものとなるのである。

とはいえこのことの次第もまだ、たましいという現象の要諦をあかすに足るものではない。かかわりをたましいの存在する様態と捉えることにあつては、まだたましいは場に居合わせることににおける機能として示し出されていないからである。だからここではまだ、人が他者として存在として生きていることであつたり、人がつねに変化

し続けながら生きていることの次第は、決してあかさされていないのである。

人がつねに変わり続けながら、他者とはことなる存在として生きていることを探究するにあたっては、世界の様相という現象に注意しなければならない。人はつねに世界のうちに生き、そこにおいてかかわりをもつ。世界はかかわりという現象の淵源なのであって、たましいのいきづくところとして、人という現象がそこから離れることのできない地平なのだ。世界のうちにいない人を考えることはできない。それは、かかわりを有さないたましいを考えることができないのと同じことである。

世界はかかわりの淵源なのであるが、しかしこれは決して、世界というものがただある実在として存在し、そこにたましいが配置されてかかわりが生じるということではない。世界はそのようなものとして予め用意されているものではなく、人がかかわることににおいて自らかたちづくっていくものであるのだ。

人が世界をかたちづくるという現象において、感じることという様態におけるかかわりの作用は理解しやすいところだろう。人は感じることにあつて、例えば空を見る。そのとき空はある特定の眩しさ、青さ、遠さといった見え方のもとに見られているのであつたが、こうした見え方は世

界をかたちづくるもののひとつである。私に隣人よりも眩しく空が見えているのであれば、私は隣人よりも眩しい世界に住んでいることとなる。一方隣人には私よりも空の色が鮮やかに見えているのであれば、隣人は私よりもより眩しくないが、より鮮やかな世界に住んでいるのだ。

人が空を見るときにその見え方が人ごとにことなることは、かかわりのかたちという現象として先にあかされたものであったが、このかかわりのかたちこそが当人における世界をかたちづくるものである。このようにかたちづかれる世界の在り方は、世界の様相として示される。人は固有の様相をもつ世界のうちに生きるのであり、その世界

の様相はかかわりのかたちにおいてかたちづくられるのだ。世界が予め用意されたものではなく、人がかかわりを有することにおいて自らかたちづくってゆくものであるというこの次第は、世界が固有の様相のもとに存しているということにおいてあかされるものである。

人はまさにこの世界の様相という現象において、自らかかわりのかたちを憶えることとなる。そのときときにおけるかかわりのかたちは、それが世界の様相をかたちづくることにおいて、憶えられ、積み重なり、かたちづくられるのだ。世界はかかわりの痕跡であり、その記憶であり、人はそこに住まうことにおいてまたかかわりを有するので

ある。たましいがそのときそこにおける單なる機能と見做されない所以は、ここに存する。たましいは世界のうちにあつてかかわりを有し、かかわりを有することにあつて世界をかたちづくる。そこにおいてたましいは自らのかたちをかたちづくるのであり、そのかたちがまたかかわりのかたち、世界の様相をかたちづくるのである。

世界の様相は確かにつねに変わりつつあるものではあるが、それはただ世界の様相が固着した在り方のもとには存していいないことを示すだけであつて、それぞれの瞬間においてコマ送りの映像のように世界の様相が変化することを意味するのではない。世界の様相は、絶え間ない変化にさ

らされつつ一貫性を保つのであり、その上で緩やかに変化してゆくものである。ここにおいて、人のかかわりのかたちにあっても一貫性が保持され、たましいがつねにかたちをかえつつも、あくまでかたちとしてかたちづくられていくことの次第があかされるのである。もし人という現象にあつてはかわりのかたちが、世界の一貫した様相に反映されることがなかったならば、人の住む世界の様相はつねに過去や未来との連關を持たず、人のかかわりはまったくそのかたちを保持することなく、たましいは自らのかたちをもつことはなかっただろう。世界の様相はかわりのかたちの記憶なのであり、たましいが世界にいきづくというこ

どの次第は、たましいが世界のうちにあつて自らのかたちをもち、知り、かたちづくることにこそ存しているのだ。

世界の様相がかたちづかれること、かかわりのかたちがかたちづかれることは、たましいのかたちがかたちづくられるという現象として示されるものである。たましいは、固有の様相を有する世界のうちに生き、固有のかたちのもとにあるかかわりを有することにあつて、自らもまた固有のかたちを有することとなる。人が皆それぞれことなる存在として生き、つねに変わりながら生きていることは、たましいが自らに固有のかたちをもち、またそのかたちをつねに変化させながら存在しているということなので

ある。人が時間を積み重ねて生きてゆくというこの次第もまた、たましいのかたちという現象によつてあかされることとなる。たましいはそのときどきにおいてかかわりを有し、それによつて世界の様相をかたちづくり、そのようにかたちづけられた世界に住むことにおいて自らに固有のかたちのもとにあるかかわりを有する。ここにあってたましいはそのときどきの時間を謂わばかかわりの記憶として有し、それによつて自らのかたちをかたちづくるのであつて、そのようにたましいのかたちがかたちづけられてゆくことこそ、人が時間を積み重ねて生きるということなのだ。

人は過去の事象を忘却するのであり、そのとき情報としての記憶は消え去って二度と蘇らないことがある。だが、このような事態にあつてもかかわりの記憶は決して消え去ることがなく、たましいのうちに積み重ねられる。この典型的な事例がトラウマであり、トラウマの對象となる出来事は確かに情報としては忘れられているのであるが、かかわりの記憶としては明瞭にたましいのうちに存しているものであり、これがたましいのかたちを変え、当人の人柄や人格といった事象に影響を及ぼすのである。

このようにかかわりのかたちが世界の様相をかたちづくるのであるが、逆にまた、世界の様相がかかわりの記憶と

して自らのたましいのかたちをかたちづくり、そこにおいて翻ってかかわりのかたちがかたちづくられるものである。世界の様相がかたちづくるたましいのかたち、かかわりのかたちのあらわれのひとつの例が、情態である。この次第をあかすためには、まず思ひのかたちとしての情態の在り方を探究せねばならない。

先に、かかわりは対象の存在を受けて初めて生じるものなのではないことを記した。たましいと対象という二物がまずあり、そこにおいて二物のあいだが生じ、それを埋めるものとしてかかわりが存するのではない。かかわりはあくまで、世界のうちにいきづきたましいの根源的な存在の

様態としてあるのであり、そこにおいて個々の実在や実存がかかわりの対象としてあらわれるのだ。このことの運びからして、かかわりはまた、特定の対象をもたずに存していることがある。感じることにという様態におけるかかわりについては、なるほどそれは実在を知覚することとしてあるため、対象をもたないということとは考えづらいかもしれない。だが、思うことという様態におけるかかわりについてはいしはしは対象を劃定できない事象があらわれることを人は日常的に経験するのであり、そのひとつが情態なのである。

思うことは、或る事柄について考えること、思索するこ

と、思念することといった様態を取ることとあれば、そうした対象を取らずにただそのときどきの所謂心的状態として存していることもあるのであった。人が刻一刻と変化し続ける心的状態をつねに有していることは、言うなればかわりの結果なのであって、そのときどきの心的状態はそれのときどきのかかわりのかたちなのだ。この心的状態は日常的には気分、気持ち、感覚、感情といった言葉で言表されるようなものであり、場における人の思いのかたち、ひいてはかかわりのかたちの基礎を爲すものである。これが情態という用語において指し示されているものであるのである。人が楽しんでること、喜びのうちにあるこ

と、悲しみに暮れていること、重々しく沈んでいること、浮ついていること、不安に驅られていること、怖れていること、などは全てこの情態のあらわれなのである。

情態がかかわりのかたち、思いのかたちとして世界の様相の反映であることは、感じることにおけるかかわりのかたちが思いのかたちをかたちづくっていることからあきらかである。峻厳な氣候のもとに立たされれば人の情態は緊迫するものであり、溫暖な場にあつては比較して情態は弛緩するであらう。場が溫暖であるか嚴寒のもとにあるかはあくまでそのときそこにおける氣候の問題であるが、これは世界の様相についても同様である。世界が如何に眩しく

如何に鮮やかであり、或いは如何に深く如何に速いかということは、人の情態の色合いや激しさ、質感に直接影響する。そしてそれは、人がどのような人であるのか、如何なる様相のかかわりに於いて世界に存しているのか、を大きく定めるものなのだ。ここにおいて世界の様相は人の情態をかたちづくるのであり、それが人のたましいのかたちとなるのである。

人が他者とともに居合わせることにあつて他者とのあいだに有する思いのあらわれは、語り合いとして示し出されていた。語り合いは、人が隣人とのあいだにもつかかわりそれ自体を指し示す語として用いられ、人は隣人とともに

いて思うことにあつて、たとえば言葉を交わさずとも語り合うのであつた。

語り合うというこの現象も、たましいという概念が導かれたいまより完全にあかされるべきである。語り合うとは、人が隣人のたましいのかたちを掴みとること、そしてまた隣人によつてたましいのかたちを掴み取られることなのである。語り合ひは決して孤独ないとなみでもひとえに恣意的ないとなみでもない。語り合ひはつねに隣人とのやりとりなのである。そこでは確かに自らのたましいのかたちが言葉や仕草として表出するのではあるが、それは一方的な発露ではなく、交互的なやりとりとしてのかかわりで

あるのだ。

語り合いのこのことの次第がゆえに、人は語り合うことであって隣人のたましいのかたちを掴みとることとして、隣人を理解し、知ろうとするのである。しかし、隣人を知ることが決して完遂されることのないおこないである。たましいのかたちはその輪郭が劃定されたものではないから、そのかたちを正確に掴みとるということが不可能である次第によつても、隣人を知り盡くすことはできないのであるが、のみならず、人はみなことなる様相のものである世界に住んでいるといふことの次第からしてもまた、隣人を知ることができないのだ。人は他者が住む世界

に住むことはできない。人は他者と実在を共有し、そこにおいて自らが現実の世界に住んでいるのであることを知るのであるが、かといってそれは他者と同じ世界であるといふことはできないのだ。人はみなことなる世界に住むからこそ、謂わばみな経験の次元をことにするのであり、そのことが他者のそして隣人のたましいを知ることを阻むのである。

しかし、人は言語を用いて語り合うことにあつて、ここに経験の假初の共通の次元をもたす。この假初の共通次元において、人は茫洋とした自らの思いのかたちを辛うじて掴みとり、その定まらない輪郭を一時的に劃定するの

だ。言語のこのはたらしきのために、人はまた、自らの思いが現実のものであることを知る。對話は、人の思いを現実の世界にもたらしものなのである。

とはいえ言葉は、ひとえに機械的な記號として意味を傳達するものではない。言葉はあくまで人の住む個別の世界のものとあつて、その様相の寫しとして存するものなのだ。だから、人は隣人の世界に住むことができないことか
らして、人は隣人の言葉がどこから來たのかを見てとることができない。これがゆえに言葉によつてもたらされる経験の共通の次元は假初のものに留まる他ないのである。假初の共通次元に留め置かれて、人は僅かに隣人の住む世界

の様相を、そして隣人のたましいのかたちを、想像する
としかできないのだ。

人において他者を知ることがかくも困難であり、他者が
底知れぬ謎として存することの所以はここにある。しかし
言葉によって他者を知ることが不可能であることの裡に
あつて、人はまた言葉によつて自らをあらわすことができ
るのであり、言葉によつて自らがあらわれたとき、そこ
に自らのあらわれたことを知るのだ。

言葉がたましいをあらわすことは、決して安易に達成さ
れるいとなみではない。言葉がたましいをあらわすため
に、語りは正しく展開され、その展開の領野のうちで世界

を正しく領有しなければならぬのだ。人はこの試みの最中であつて悉く誤るものである。だが、言葉は自由であり、いまよりもより正しい語りへの道は開かれているのだ。

語り合うことにあつて人は、隣人のたましいのかたちを想像するのであり、これは交互的なやりとりとしておこなわれるのであつた。このことの次第はまた、語り合うことにあつて人のたましいの純粹なかたちがあらわれ得ることのないことを示している。語り合ひは呼應する現象であるがゆえに、そこに表出する言表や仕草はたましいのかたちの純粹なあらわれとはならない。やりとりであるからこ

そ、それは欠けた状態におけるたましいのかたちをしかあらわさないのである。尤も、人がひとりであつて思うときも、その思いのかたちはつねにたましいの純粹なあらわれであるといふことはできない。およそ日常的な状態にあつて人の思いは放漫で弛緩した在り方において存しているものであり、人はそのような在り方における思いを認め統御し、馴らすのであるから。ここにおいてはたましいのあらわれはあくまで未然的な状態に留まっているのだ。

しかし人はまた、たましいのかたちが純粹に自らをあらわすこととして、語ることがある。このような語りこそ本源的な語りなのである。このとき人は、自らの思いを統御

して語るといふのでは必ずしもなく、たましいが自らをあらわそうとするがまに語る。本源的な語りにおいて特徴的な事柄は、語りのうちでたましいのかたちが現実の世界にもたらされ、世界にしるしづけられる点にある。人は根源的に語ることにあつて謂わば取り憑かれたかのように語ることもしばしばあるのであるが、これはたましいが自ら現実のものとなること、あらわれることを希求するからに他ならない。

本源的な語りは語り合ひでないのであるから、それは孤独ないとなみとしてあらわれる他ない。ここにあつて、本源的な語りは作品をつくることとしてあらわれる。作品と

いう様態にあつてたましいは、文章、造形、音楽などの形態のうちに自らのかたちをあらわすのだ。作品はたましいが自らを世界にしるしづける縁なのである。

しかし作品をつくることにあつても、たましいは完全にそのかたちをあらわすこともあれば、不完全にか自らをあらわさないこともある。これは、作品をつくるためには技術が必要とされるからであり、作品制作においてたましいが自らをあらわすといつても、作者の技量が伴っていないければ、それは不十分な仕方において僅かに爲されるに留まるものである。

個々の作品ごとに要される技術はことなるものではある

が、如何なる形態の作品においても欠かすことのできない技術として、語りを展開する技術が挙げられる。文章はひとつの言葉で終わるものではなく、造形は一本の線に終始するものではない。語りとは、言葉や文、線や色面を紡ぎ紡いだ果てに見出されるものなのであり、そこにおいて漸くたましいのかたちを寫しとるものとなるのである。たましいのかたちや思いのかたちというものは、一舉に掴みとることのできるような安易な代物ではない。それは深く曖昧で遠いものである。さらにそれは、文章のように線状に伸びるものでも、造形のように面的に廣がるものでもなく、どこにもないかたちのもとにしか存在していないもの

なのだ。だからこそ、そのかたちをよりよくあらわそうとするのであれば、人の手によつて表現し得るところからなるべく遠くまでゆかなければならないのだし、そのためにはあらゆる記號がもつれて絡み合い、溶融するかに見えてなお整然とした論理が潜んでいなければならないのだ。

実に展開することは語りにおいてこれを可能にするのであり、ゆえに語りという現象の要諦を爲すものなのである。

展開する語りには固有の正しさが存しており、ここにおいて誤った展開と正しい展開が存する運びとなる。語りはその展開の裡で須く世界を領有しなければならず、その領野の廣さと領有の確かさ如何にこそ、展開の正しさが宿る

のだ。語りが世界を領有しなければならぬことの次第は、世界こそかかわりの淵源であり、〈ひと〉の存するところであり、たましいが現実のものとしてしるしづけられる地平であることによつてあかされるだろう。語りがたましいのかたちをあらわすものであることは、語りが僅かにかかわりのかたちをあらわし、世界の様相をあらわすのであることによるのに過ぎない。人のかかわりは世界のうちにあり、しるしづけられ、その痕跡を落としているのであるが、語ることはそのかかわりのしるしをひろくにゆくことなのだ。世界を領有するとは、自由な足取りで確かにそのいとなみをおこなうことなのである。

だから、展開の正しさはすなわち語りの自由なのだ。語りは自由であり、またより自由な語りが存しているのであり、その果てには世界を踏破する語りもまたあるべきなのである。

総じてここまでの記述で述べられてきたのは、語りにおいてたましいが世界にしるしづけられるということなのであった。だが、このことの次第を完全にあかすためには、しるしづけるといふ現象について愈々述べなければならぬ。

しるしづけるとは、言葉の成り立ちの通りしるしをつけることであり、謂わば痕跡を残すことである。しるし

は、石のように可視的な徴標として存していることもあれば、風のようにただその存在を感じ取ることしかできないものとして存していることもある。いずれにせよそれは世界のうちに残されたものであつて、人はしるしに觸れることでその存在を感じ取るのである。

しるしには、理解されることがぞくしている。すなわち人はしるしとかかわるのであり、逆に人とかかわらない痕跡はしるしと呼ぶことができない。人はしるしとかかわることに於いてそれを理解し、解釋する。

しるしは殘存するものとして、人という現象——時間
を積み重ねて生きてゆくこと——の基礎を爲すものであ

る。世界にしるしがなかったのであれば、かわりを積み重ねることでもかたちづくられた世界の様相もまた、その由来は永久に隠されたものとなり、人という現象がいとなまれることもまたなかったであろう。

本源的な語りは、作品として世界にしるしづけられる。作品となる前の未然的な状態にあつては、語りは世界にしるしづけられることができない。語りが輪郭のない思いのかたちとして人のうちに留まつている限り、それはしるしとして人の解釋の對象となることはなく、またたえ思ひのかたち、たましいのかたちが語りとしてあらわれたとしても、未熟な展開のもと不完全にそのかたちをあらわすに

留まつたですれば、それはやはり充全なしるしとしてあらわれていないこととなる。

しるしとしてあらわれていない、あらわれの未然的な状態にある語りのひとつが、祈りである。祈りは未だあらわれていないから、祈ることによつて人が自らのたましいのかたちを世界にしるしづけることはない。祈りはたましいの震えの余波とでもいったものであり、祈りという在り方にあつては、その余波が他者のたましいのもとにまで届くことはないのだ。だが人は、祈ることのうちでたましいを世界に届けることを希求するのであり、のみならず、たましいが世界に届き得るのであることを予感するのである。

ところで本源的な語りは、語り合いという状態においてはあらわれることのない、孤独ないどなみであることがあかされたのであったが、しかし語りはまた、決して誰のものにも届かずに消失するものではない。もし語りがそのようなものであるとすれば、語りは決して世界にしるしづけられることのない、空虚ないどなみとなるほかないのだから。

本源的な語りは世界乃至（ひと）への呼びかけという状態のもどにある。本源的な語りはそもそもたましいが自らあらわれようとする現象として示されたのであるが、このことの次第がすでに、たましいの本源的な希求として世

界乃至（ひと）への呼びかけが存することをあかしている
のである。

本源的な語りは人において、決して語りを届けることのできない他者に向けたいとなみしておこなわれることがある。もう会えない人に向けて思いを認めることや、故人のために作品をつくることなどがそれである。だが、このような事例にあっても語りはあくまで世界乃至（ひと）への呼びかけとして存しているであって、それは人が自らのたましいを世界にしるしづけることとして、語りという現象があるといふことの次第によつてあかされているものである。

語りは世界乃至（ひと）への呼びかけとして、世界乃至（ひと）に届くものである。これは先に述べた通り、必ずしも語りの向けられた相手にその語りが届くことを意味しない。それでもなお人が語りを届けるのであることは、この世界が人のたましい、人の思い、人の語りによってしるしづけられた世界であることから知られることである。しるしづけられていることは世界の存在の根源的な様態であり、しるしづけられることによって世界は、その様相や意味を変容させる。語りを届けることは、語ることによって世界の様相を変容させることをその意味のうちに含んでいる。世界の様相が変わることによって、語りは（ひと）

どのかかわりをもち、〈ひと〉に届くのだ。

呼びかけがあらわれ、語りとして世界にしるしづけられることにあつて、そのしるしは人の存在の在處である。しるしが人の存在の在處であることは、單にそれが人のたまたしいのかたちの寫しであり、ゆえに人の存在を示すものとしてほたらくからであるのではない。語りが存在の在處として世界にしるしづけられることはまた、人という現象のあり方として、人が時間を積み重ねて生きてゆくのであることに由來するものである。

存在の在處という言葉の意味するところは、それが決して僅かに残された痕跡や形象を留めた抜け殻のようなもの

として存するのではなく、いまなお世界にいきづくし
として存していることなのである。そこで存在の在處は自
らの呼び声を発しているものであり、人はまたそれにしるし
づけられ、引き止められ、或いはそれを足場として立つこ
とにおいて、生きているのだ。人が時間を積み重ねるとい
うことの次第は実にここに存している。人は自らの存在の
在處から正常に時間が伸びてゆくことにおいてその線上に
生きていることもあれば、或る存在の在處から時間が伸び
てゆかず、そこから断ち切られて幽離することにおいて生
きていることもある。いずれにせよ人が生きることにあつ
てその存在の在處はいまなお世界にいきづき（ひと）にそ

して自らに届けられているのであって、また人は自らにおけるいまここを次の存在の在處として世界のうちに置き留めながら存しているのである。

存在の在處はまた、隣人とともに過ごすことにあって、隣人の裡に預けられるものでもある。人が人とともに過ごすことは、紛れもなく自らの存在の在處を人に預け、また人の存在の在處を自らも受け取ることとしてあるのだ。

隣人の裡に預け入れられ預け置かれた自らの存在の在處は、隣人の裡で隣人とかかわりを持ち、隣人の思いのかたちの裡で自らのかたちを保つのであり、またそこにおいて変容してゆくものである。例えば隣人の私に對する感情が

好意から嫌惡に変わることで私の存在の在處は變形し、その人が私を忘れることで消失する。私はそのことについてどうすることもできない。存在の在處はつねに私を人という現象として世界にいきづかせるものでありながら、私の手のうちにはないのである。時間を積み重ねていきてゆき、いやが上にも時間を積み重ねて生きてゆくことが、人においてかくもまなならぬものであるのはこのためだ。だがそれでも人は生き、語る。人はそのようにして、自らの存在の在處を探し、尋ねてゆくのだ。

最後にひとつ、記しておくことが残されている。ここまでの論考はすべて、時間の積み重ねのうちににおけるたまし

いのかかわりを記すことに捧げられてきた。だが、たましいは一時的に、前後の時間とのかかわりを断ち切られることがある。これは、たましいが時間の積み重ねを喪失することでは決してない。ただ、そのときその場における経験の様態が、純粹に居合わせることのうちに埋没し、隣人とともにあつて経験の輪郭が消失するのである。このとき人は自由であり、しあわせである。しあわせは、世界にしるしづけられることがない。しかしそれは私の記憶に残り、私がある後も生き續ける限りにおいて私のたましいとかかわりを持つ。隣人においてもそうであるかは、私には当然知る由はない。確かなことはただ、そのときその場で私の

裡に預け入れられた隣人の存在の在處は、そしてまた隣人の裡に預け入れられた私の存在の在處は、ひときわ大きなものであるということだけだ。それがいずれかたちを変え、消えてしまうものであつたとしても。

繪 文

廣 瀨 智
小 山 華 林

